

【資料】

授業中の学生の能動的思考を促す記述用紙の工夫

菅 井 直 也

The Device of the Description Form Prompting Students
to Think Actively in Class

Naoya Sugai

はじめに

学生相互や授業者との双方向の交信は、本来授業中の質疑や討論として、口頭ベースで行われるべきものであろう。ソクラテスの問答法を持ち出すまでもなく、時代を超えて世界的な伝統的方法である。とはいえ、現今の日本の教室で、これは容易には実現しない。大学の教室に到達するまでの学生の過去に、これを避けるべきとする、何らかの事情が作用している。

それが何かはひとまず措いて、これを克服するために筆者がしてきた工夫を整理しながら、学生の能動的な学びを誘う手がかりを探ってみたい。

1. B8版出席カード：表裏の活用とプリントによる共同思考

学生の出席を確認する方法の代表的なものは、古来から呼名であろう。教員が出席簿なる帳簿を携えて出講し、受講者リストを一人一人読み上げて、当該学生が返事をするもの。いわゆる「代返」や途中退出などの不正手段もお馴染みである。対抗策として、出席カードなるものに自筆記入させる方法も用いられる。大学や学部毎に、この用紙が用意されることも多く、刷色を変えて数種類を用意し不正に備える例もある(図1)。大人数の授業のためにOCR対応の用紙を用意する大学もあるようだ(近年、学生証の磁気カード化、ICカード化により授業毎の出席確認を電子的方法による大学も増えているが、本稿の目的は出欠確認方法そのものにはないので、紙ベースまでの言及にとどめる)。

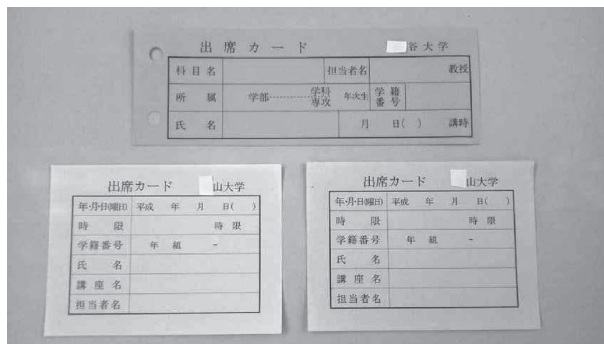


図1 「出席カード」の例

小生の初任校はこの用紙の用意がない大学で、受講生100名余の授業から担当することになった。先輩教員たちは、毎回の授業の冒頭に長い時間を費やして、ひとりひとり呼名しているようであったが、小生はこれを避けるべく、出席カード方式によることとした。とはいえ、自前で刷ってはいられないし、要は学生番号と氏名が書ければよい。そこで、知己の印刷所に頼んで裁断屑を名刺大（B列8版）に裁断して譲ってもらい、これを使った。名刺大のため、市販の名刺整理用品を用いて管理できるという目論見もあった。

このB8版の紙片に、学生番号と氏名を記すのみではもったいない。そこで残りの空白を用いて、①授業での学習活動内容 ②授業での気づき（発見、着想、疑問）③あれば仲間へのメッセージ、授業者へのメッセージ（質問・意見・提案など何でも）を記すことを求めた。

加えて、「時には私が問いを出して、その答えを記入してもらうこともあります。（だから授業の最後に指示があってから記入して下さい）」「コピーをとりますから薄い鉛筆は使わないでください。黒のインク、ボールペンを歓迎します」「時には授業で紹介することもあります。困る時は、（禁）とはじめに記してください。」「提出は、授業後の休み時間終了までを原則とします。」「教員はそれなりの準備のもとに授業をしているのであるから、学生たるものも何らかの反応をするのはマナーである、権利あるいは責任とも言える」と言ったこともある。

配布のタイミングは授業中のどこかの時点だが、記入時間は授業終了前に5分を確保することとした。「書き方の注意」として、「授業の終わりに、書く時間を5分間保障しますから、決して途中で書かないでください。『起承転結』が終わらないと、授業の本当の意味は分からないことも多いはずですよ」と念を押した。

この結果、学生は何と数十字から、細かい字で200字弱をも書き綴ったのであった。

質問には次回あるいは後日の授業のテーマとして回答し、誤解や理解不足に対しては翌週に詳細な補足が可能になった。

ところで、学生の記述内容には、類似するものが散見された。もちろん教員の力不足のポイントでは同じ質問が寄せられよう。同じ講義を聴いているのだから同じ感想をもつこともある。そこで、学生と教員の単純なコミュニケーション・ツールではなく、学生間の意見交換を演出するツールとすべく、KJ法的なアレンジ¹⁾をして印刷配布することにした（図2）。ここでは林義樹²⁾の「感想ラベル」「ラベル思考」³⁾の提案が参考になった^{4,5)}。

そもそもB8版だから、16枚並べればB4版に収まる（当時はB4版が官庁や学校用紙の主

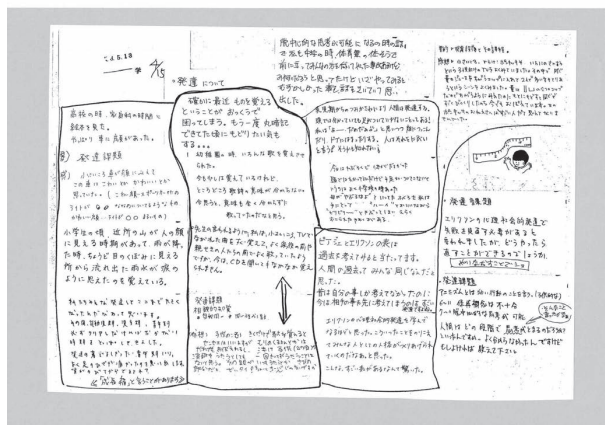


図2 B4版のプリント

流であった) わけである。余白を除けたり重ねたりすれば20人以上を掲載することもできた。翌週にこれを配り、補足のコメントをすれば格好の復習になる。

B 8 版の出席カードからプリントを編集する作業は以下の手順となり、結構な労力を要した。
 ①全てのカードを読んで、プリント候補を絞り込む。②カードをコピーし、学生番号・氏名を切り落とす。③B 4 版用紙に貼り込み、マーカーで囲んだり補足を書き込んだりする。④印刷する。

②の作業は、実名つきで配られることで、学生が他者の目を意識して警戒したり萎縮したりして、内容にバイアスがかかるのを避けるために不可欠と思われた。

しかしながら手間を要する②を省略するため、翌年からはカードの表面に学生番号・氏名を、裏面にコメント等の記述を求めることにした。さらに、B 4 版のボール紙(後にプラスチック板)にスプレー糊を塗っておき、ここに学生から回収したカードを貼り付けて、そのままコピー機に載せて印刷版下を作成した。貼ったり剥がしたりが容易だから、レイアウトを変える編集作業が短時間になった。

とはいえ、1回の授業につき翌週までには印刷まで終えていなければならない。学生の記述を読むだけで相当のエネルギーを要する。授業批判や内容の誤解が予想される時など、着手までにストレスを感じたことも一再ならず。そして授業は一科目だけではない。結果として、担当するすべての授業でこの方式をとるには難がある(先述の林には、授業後のKJ法的な整理までをグループ化した学生に課した実践をした例がある⁵⁾)。ただ、全員分を採用できるほどの少人数の授業ならば、教材プリントの作成とさして変わらない労力である(図3)。

プリントを受け取った学生は、自分の記述が掲載されていれば嬉しいのはもちろんだが、自分と同内容のものが他の筆跡で書かれている、すなわち、自分と同じことを書いた同僚がいるということに親近感を持ち、受講のモチベーションを高めることに役立ったのである。

この方法は実のところ、授業内容をテーマに学生が討議すれば明白になることなのだが、当時すでに、学生が授業中に積極的に発言することを避ける風潮になっていたから、このカードは、それを誘発する、もしくは紙上討論に擬する仕掛けだったのである。言うなれば、かつてのDJ番組のリクエストカードのノリに倣ったわけである。因みに、記述の末尾には、自分のマークを決めて毎回これを書かせ、名前は分からないが同じ人物の記述であることをアピールすることにした。

さてこのカード、授業時には、出席管理ツール兼レスポンス・ペーパー、紙上討議のツールだが、教員の手許で一覽的に管理しようとする、学生毎に保管するか、あるいは授業回次毎に保管するか、決めかねる悩ましい問題となった。学生個々の学びの質や変遷を追うには学生毎に一覧できたほうがよいし、毎回の授業自体を検討したり、同じ時間の学生間の比較をするには、授業回次毎に全員分を一覧したい。実のところ、年により、学生毎に保管したり授業回

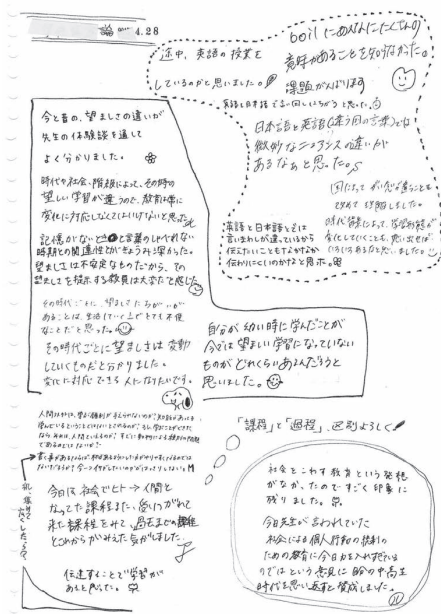


図3 A 4版に17人分を掲載した例

次毎に保管したりと、決着がつかず行き当たりばったりの気まぐれに任すこととなった。

原理的には、表計算ソフトのスプレッドシートのように管理できればよいのだが、1枚1枚を画像処理して表計算ソフトに入力するのは、技術的には可能だが、受講者100名で15回の授業では1500のセルを作成しなければならない。毎週時間と手間をかけるべきかどうかの生産性の壁の問題である。

2. 複写紙による出席カード：控を手元に

ところで、授業毎に学生のすることは、毎回記述を求められるから書いて提出しているだけである。もちろん、大半の学生は熟考して書くのだが、提出してしまう小紙片だから、ノートに下書きしてから清書して提出するとか、後刻同内容をノートに書き留めておくという学生は皆無である。だが書かれた内容は優れたものがあり、そうでなくとも本人の学びの記録である。また、卒業後の社会生活を考えれば、提出物には責任を持たせたい。後日の返却で事足りりとするのではなく、当日の授業で到達した思考を、復習や予習の出発点にしてもらいたい。それには学生の手許に写しが残ればよい。仮に教員の手許に回収後、全員分を複写して原本を返却することにしたところで、タイミング的には翌週の授業になろうし、小紙片を返されても大半の学生は紛失するのが関の山である。

そこで、偶々予算が使えたこともあり、ノーカーボン複写紙を用いたB6版の出席カードを作成して使用してみた。学生も教員もルーズリーフのバインダーに綴じて管理できるよう、パンチ穴を開けた。控え片は薄紙だが、提出片は腰のある用紙を用いてカードとして扱うことを狙った。薄い記入片が学生の控え、硬い複写片が提出用である(図4)。

100人もの大人数になるとB6版カードでは扱いにくくなり、KJ法的な処理をしても、カードをそのままコピーして配布用プリントとするのは困難である(表1)。

それで結局、大人数の授業はB8版、小人数の授業はB6版複写用紙と使い分けることになった。ただし、何れの場合も授業冒頭に、前回の学生の記載を取り上げてコメントしたり補充したりは可能である。

理論的、技術的には、B8版の複写用紙にすれば、学生の手許に控が残り、かつ16枚以上を掲載したB4版プリントも作成可能になるはずであるが、B8版の薄片の控えを学生が保管管理するのは困難というべきで、現実的ではなからう。

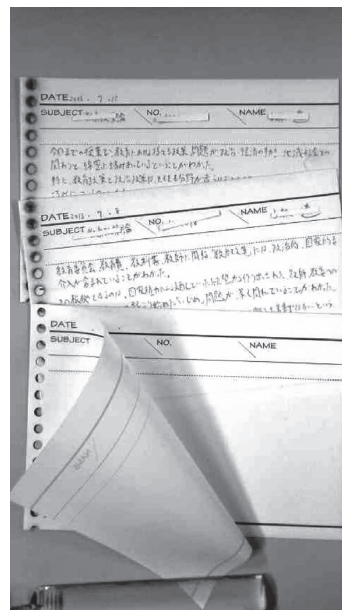


図4 最下段が未使用分

表1

	プリントによる還元	学生控え
B8版紙片方式	可	不可
B6版複写紙方式	困難	可

3. A4版ケント紙両面を用いた出席カード：一覧性の共有

思考の成果の蓄積と授業者との双方向交流という点に目的を絞り、KJ法的な処理やプリント

授業中の学生の能動的思考を促す記述用紙の工夫

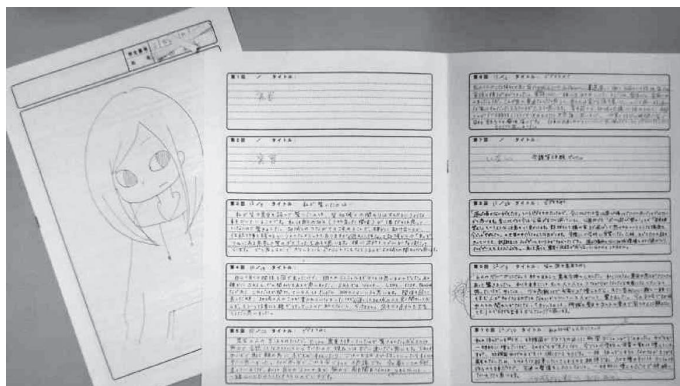


図5 左から第1頁, 第2頁, 第3頁, 第4頁も同意匠

して配布することをひとまず措き, カードスタイルを一旦離れることにしたのがこれである。A4版に授業5回分のスペースを区画し, 第1頁はフェイスシートとして必要事項の記入欄, 第2～4頁は3頁×5回分=15回分の記入スペースをレイアウトし, これをA3版表裏に印刷して二つ折りにし, A4版4頁に仕上げた。1回分には, 授業回次と日付欄のほかタイトル欄を設けて, 「お題」と称して内容指定する際に備えた。内容の記入は6行に亘って可能にしてある(図5)。

学生は授業の初めに受け取った自分のカードのその日の回次の欄に, レスポンスを記入して退出するのが授業終了時のルーチンである。「お題」のあるときはそれに従う。このあたりは, B8版用紙と変わらない。欠席者の分は, 教員の手許に残っているから, 空欄のままとなるが, そこに教員が欠席の旨を記入しておく。

授業の最後に記入時間をとることや, 内容を指定することがあるのもB8版の時と同様である。回収した後, 教員が読み込み, 必要なレスポンスを書き込んで次回の返却に備える。アンダーラインだけだったり, 波線だったり, 花丸だけだったりの, マークだけの場合も少なくない。「アンダーラインだけ」の意味は, 淀川工業高校吹奏楽部⁶⁾の実践⁷⁾にヒントを得たもの。

斯様なわけで, 15回終了時には, 出欠とレスポンス内容が一目瞭然となる。

15回に亘って, 用紙が学生と教員の間を往き来するため, 通常の印刷用紙では腰の強さに不安があり, ケント紙を用いている。二つ折りにしても, カードらしくしっかりしている。20人分を超えるとずっしりと重たいが, 固いカードを手渡されることで, 学生は, 記入をいい加減に出来ないという無言の圧力を感じるようでもある。

第1頁の最上部に学生番号欄と氏名欄があるが, この下部に広がる空白部をどう使うか, 今のところは, 似顔絵を描かせ, その他授業担当者へアピールしておきたい自己紹介を記入してもらっている。さまざまな使い方の可能性があり得るスペースである。第1講のオリエンテーションに似顔絵を求められる授業は希少だから驚きながらも, そこは毎日幾度も鏡と対面している学生だから, 皆, 上手に描く。「似顔絵を描いて下さい」としか指示しないので, 顔を大きく描く者, 小さく描く者, 隅に描く者…下手な性格検査にも勝る情報が得られる。ごく稀だが, 抽象画で描く者や細密描写並に描く者がある。教員としては, 名前と顔を一致させる手がかりとして重要な資料でもある。

毎回, 日付けとともに内容が記入されてゆき, 欠席すると空欄のまま残るため, 学生, 授業者ともに, 出欠状態はもとより, 毎回の思考の記録が一目瞭然である。学生が手元で目にする

のは授業中に限られるが、思考の記録を一瞬にして把握でき、しかも学生と授業者が共有できる利点がある。

ケント紙の二つ折りは、字義通りのポートフォリオである。そのため、次節で取り扱うレポートなどが、これに挟まれた状態で提出され、返却される。そのほか書類の授受に活用できる。ささいなことだが手間と注意力の省力化にも貢献するツールとなっている。

4. レポート相互添削用コメントシート：他者の発見と共有のために

事前学修、あるいは事後学修の報告としてレポートの形で提出を求める場合、「出せばいいんでしょ」的なその場限りになる者が少なくない。下書きや推敲を重ねての清書が提出されたとは言いかねるレポートも少なくない。また、優れたレポートも、学生と教員の間で授受されてお終いでは、なんとも惜しい。

そこで、玉石混交の目的になるが、①「読者」の存在を前提にした記述を意識する機会 ②他人のレポートに学ぶ機会 ③他人に助言する機会 ④書類を標準化する機会 を提供することを目的に書式を用意した（図6）。

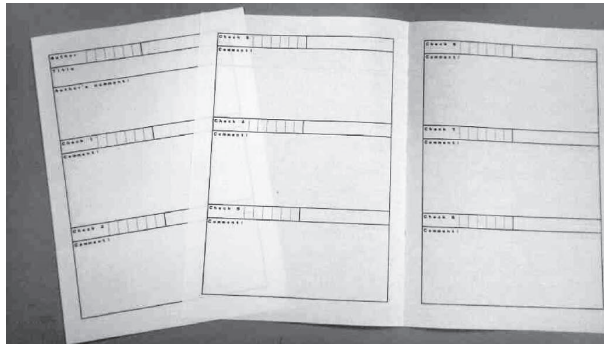


図6 左上に本人記入欄。中央が第2頁

レポートには出題された課題が存在し、全員が同じ課題に沿って調べてまとめたレポートとはいえ、学生個々に強調点も違えば結果も違う。作成過程での学びや発見も違う。それを要約すれば表題（title）が付く筈である。さらに、レポート本文を仕上げたコメント（author's comment）もあろう。学生番号や氏名のほかに、改めてこれらの記入欄を設けることで、意識化を求めることにした。

用紙にはさらに、学生同士で読み合いをする際の、それぞれの記入欄として、学生番号、氏名、コメントの欄。裏面に刷られる第2頁までで、5人分が収まる。全4頁でコメントーター11名まで可能である。

この用紙をフェイスシートとしてレポートの頭に糊またはステーブラーで貼付し、この状態でグループ内で回し読みする。メンバーの組み合わせは、学科専攻や人間関係から視点が偏りにくいよう、教員サイドで工夫して指名する。

信じ難いことだが、この用紙をレポート本体に貼付する作業が結構混乱する。回し読みに備えて、冊子状に頁をめくってゆけるようにするのが目的なのだが、書類の頁を整えたり、用紙のサイズを揃えたりして標準化する体験に乏しいためか、しばしば珍妙な不便な貼り合わせを

する者がある。

準備ができれば、机もろとも車座になり、レポートを隣へ回す。前の順番の人から受け取ったら、筆者のコメントを読み、レポートを読み、必要があれば色ペンを使って添削し、最後にコメントを書いて、次の人に回す…。再び自分の手許に帰ってきたら、学友たちのコメントを読み、再び自らのコメントを加える。それが済んだ状態で、教員の手許に回収される（実際には、回し読みの後、全体での討議を行っている）。教員は、いわば学生たちによって下読み済みのレポートを、彼女らのコメント込みで手渡されることになる。

最初のうちは、ベタ賞めの文言が並ぶだけで、添削どころではないことが多いが、この体験を3回もすると、レポート自体もしっかりしてくるし、それなりのコメントがつけられるようになる。やはり優れた他人のレポートに学ぶことなるし、「人の振り見て我が振り直せ」も作用するわけである。こういう段階になると、講義につづく討論もアクティベートしてくる。

最終的に落掌する授業者教員は、当該学生のレポートと学友の評価だけでなく、学生番号をキーとして、同一学生のコメントだけを横断的に見てゆくことも可能である。ここに、評価用のループリックを作成して適用することが可能と思われ、検討をはじめたところである。

また、学生による回し読みのための評価ループリックを用意することも、検討すべき課題であろう。

5. 付 言

30年に亘り学生と授業をしてきて思うことだが、学生が授業中に口頭で表現する（あるいはしない）ことだけが、思考のすべて、学びのすべてではない。教室で、あるいは口頭で表現し得ない（事情を慮って表現しない）思考内容を、いかなる方法で表現し、学ぶ仲間と共有し、深めることができるのかを、探り提供してみたい。

それは、ある種専門的な心理技法によらずとも可能な、素朴なツールであるべきであろう。あきらかにイジメられた末にここにいると思しき学生を視野の片隅に置きながら、ひとまずは、カードと呼ぶには大きな用紙の可能性を探ろうと試みている。諸兄の経験に学びたい。

註

- 1) 厳密な KJ 法とは言い難いため、KJ 法的とする。(KJ 法自体については、川喜多二郎『発想法』1967 中公新書 参照。同氏考案の情報処理法で簡潔にカード化した情報をグループ化しながら発想に資する方法)
- 2) 当時、中村学園大学。後に武蔵大学、日本教育大学院大学。
- 3) 林義樹 『学生参画授業論』1994, 学文社, pp. 46-50, 65-66
- 4) 同上 p.137
- 5) 当時、以下をも参照した。
林義樹「大学における授業実践-6-第2部 学生参画の実際的方式1 授業に全員参画の発表活動を——クラスみんなの「認識の探検的登山法」——前——『季刊教育法』(73) 1988.7 pp. 145-149
林義樹「大学における授業実践-7-第2部 学生参画の実際的方式1 授業に全員参画の発表活動を——クラスみんなの「認識の探検的登山法」——後——『季刊教育法』(74) 1988.10 pp. 100-105
- 6) 大阪府立淀川工業高等学校(現、大阪府立淀川工科高等学校)
- 7) 同部顧問 丸谷明夫は、日々「合奏ノート」なる感想ノートの提出を課し、コメントを加えて返却するのを常とした。NHK テレビ番組 『ドキュメントにつぼん「みんなで吹いたら日本一」』2000.1.7放送ほかの映像によれば、アンダーライン(のみ)であることも多く、これが有効に機能していることがうかがえる。

—平成28年1月22日 受理—